

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530813

研究課題名（和文） 児童・生徒の合唱能力を高める指導法開発研究

研究課題名（英文） Research of guidance methods to improves children's and student's chorus abilities

研究代表者

虫明 眞砂子（MUSHIAKI MASAKO）

岡山大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：90206847

研究成果の概要（和文）：本研究では、ハンガリー、フィンランド、伊、米国および日本国内の実績ある児童合唱団、小中高校の合唱団等の視察を多数行ない、21世紀の合唱に相応しい指導法や発声法について検討した。その結果、欧米と日本の発声の捉え方の相違を理解することが極めて重要であることを指摘した。その上で、ハーモニー感を育成するためには、コダーイ・システムを柔軟に活用すること、及び和声的・非和声的な音感を養う発声練習の方法、咽喉に負担のない頭声的発声、更にウォーミングアップを取り入れることの重要性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：Investigation of a hoping method of instruction for a chorus in the 21st century was carried out in this research. Many observations of chorus groups with their achievements were made for the purpose, and elementary schools, junior high schools and high schools in Hungary, Finland, Italy, the United States and Japan were visited. It was, as a result, emphasized that understanding of differences in a view of vocalization between Western and Japan was very important. Necessity of following matters was pointed out accordingly to bring up a sense of harmony, that is, flexible use of the Kodaly System, vocal training for bringing up a sense of harmony and non-harmony, head voice vocalization without burden for a throat and warm-up of vocalization.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：合唱、基礎能力、発声、コダーイ・システム、指導法、ウォーミングアップ

## 1. 研究開始当初の背景

筆者は、声楽発声法に関する研究として、イタリアのベルカント唱法を基本とした発声のメカニズムを研究し、言語や作曲様式の特徴に適応した発声指導法、更に、日本語を咽喉に負担なく、言葉を明瞭に響かせるための方法をイタリアやドイツの歌唱法や発声法との共通点を探りながら研究してきた。また、日本歌曲の演奏を通して日本語をいかに明瞭に美しく響かせることができるかの研究を深めると同時に、日本人作曲家の作品研究等を行い、演奏における様々なアプローチを試みてきた。また、学校教育の歌唱に関しては、「第7次学習指導要領」に導入された「自然で無理のない声」や「曲種に応じた発声」を踏まえて、歌唱教育の実践的な指導法やコダーイ・システムの実践研究を行っているわらべうた研究会やコダーイの音楽教育システム研究会に参加してきた。

この「自然で無理のない声」や「曲種に応じた発声」の発声法の研究を行う中で、どのような指導法が相応しいのか、また、日本の伝統的な発声は学校教育でどのように取り入れるべきか、さらに、児童生徒が授業等で取り組む合唱教育を充実させるためには、発声を含む合唱の基礎的能力はどうあるべきかという問題に取り組んできた。これまでの歌唱における発声法研究としては、西洋言語の発声と日本語の発声との比較または接点を見出す研究方法が主であったが、実践的な指導法については明確ではなかったと考えられる。

日本声楽発声学会では、学会会長で耳鼻咽喉

科の医師でもある米山文明氏を中心に、日本語の発声教育の遅れを指摘し、学校教育において児童生徒の成長に応じた発声はどうあるべきかについて研究を開始した。

本研究に取り組んだ動機は、2003年8月～2004年6月に文部科学省在外研究員として、米国インディアナ州立大学において、International Vocal Ensemble(World Music)、American African Vocal Ensemble(Multi-cultural)、Singing Hoosiers(Show Choir)の合唱授業の視察・参加、及び現地小中学校視察等により、合唱指導法・歌唱指導法を研究したことに発する。これらの指導の中で見られたコダーイ・システムが合唱教育に有効に働いているのではないかと自らの体験を通して感じたことから、合唱教育とこのシステムの関わりを明らかにすることにより、21世紀の日本の合唱指導法を確立したいと考えた。

## 2. 研究の目的

(1) コダーイ・システムによる指導法と発声との関連性を明らかにすること。

現在、日本の小中学校での歌唱は、これまでの発声の指針であった頭声や、頭声的な発声が重視されなくなったため、指導者にも子どもたちにも発声の目標が見えにくくなった。その結果、頭声的な発声でなく、地声を用いた歌唱が多くなっている。これは、現在の音楽教育が音楽的な美や質の向上よりも、授業の楽しさや多様な音楽の体験等に関心を移しているためと考えられるが、日本で歌われるいわゆる地声発声は、美的要素に乏し

く、児童生徒の成長過程において、喉頭への負担が大きいと考えられる。コダーイ・システムを用いているハンガリーの音楽教育では、地声の質も美しく、頭声も美しい響きで用いられ、清潔な音程による美しいハーモニーが早期教育からの積み重ねによって成立している。ハンガリーと日本の音楽教育の相違点を明らかにし、日本の小中学校で、自然で無理のない発声を指導する方法を見出すこと。

(2) 日本語の歌唱とコダーイ・システムで行っている歌唱の比較検討。

日本語で歌唱は、発声面において、イタリア語やドイツ語、英語の歌唱よりも歌いにくいとされている。日本語による歌唱とハンガリーのコダーイ・システムで行っている歌唱を比較し、相違点と共通点を明確にすることで、日本語をいかに明瞭に響かせて、美しい声で歌うかという日本語の発声の課題を追求すること。

(3) 自然で無理のない発声の質と体系的な指導内容の検討。

幼少時からの体系的な歌唱指導法、発声指導法を確立すること、また和声感を育成することは、児童生徒の身体の健全な育成、また生涯を通して音楽に親しむ基礎を培うという生涯学習の視点からも重要な課題である。ハンガリーを中心とした欧米諸国では、コダーイ・システムによる歌唱指導で、その国の伝統的な歌唱を活かしながら、西洋的な発声を用いた合唱曲などが学習されている。児童生徒に適用すべき日本語による自然で無理のない発声の質と指導内容はどうかを検討すること。

(4) 21世紀の合唱や歌唱に求められる指導法等の検討。

今後の合唱教育の方向性を分析し、21世紀に合唱や歌唱そのものがどのように発展、展

開していくのか、そのベースとして義務教育ではどのような合唱教育・歌唱教育が求められるのか、またその指導法は何か等々を考察する。

### 3. 研究の方法

(1) 19年度；〈コダーイ・システム〉と合唱活動との関連性の検討。日本の合唱教育の今後の方向性や新たな指導法の検討。

① ハンガリーの視察訪問：ボチカイ通り保育園、ロークシ小学校、ケチケメート コダーイスクール、コダーイ音楽教育研究所、バルトーク女声合唱団、セグド科学大学ユハース・ジュラ教育大学。

② フィンランドの視察訪問：シベリウス音楽院合唱授業、ヘルシンキ男声合唱団のリハーサル。

③ コダーイワークショップへの参加。

④ ハンガリーの合唱に精通した合唱指揮者へのインタビュー（JCDA 日本合唱指揮者協会会員）。

⑤ 西宮少年合唱団、群馬教育大学附属中学校、宮城県第三女子高等学校の視察。

(2) 20年度；欧米の学校や音楽機関における「発声指導」の扱い方、欧米と日本の合唱指導法や歌唱指導法の相違点等の検討。日本語の歌唱法・発声法の検討。

① イタリアの視察訪問：国立ベネデット・マルチェッロ中学校(ミラノ)、国立カルロ・ポルタ中学校(ミラノ)、セストサンジョヴァンニ市立音楽学校、国立ミラノ・ヴェルディ音楽院児童合唱コース。

② 欧米の学校教育における「合唱指導」の実践法分析（19年度視察コダーイスクールの合唱団と米国小学校の比較）。

③ 日本歌曲集 CD 制作及び日本の創作オペラ出演。

④ ハンガリー合唱曲の指導及び指揮（演奏

会名：第2回時と音の融合、岡山大学五十周年記念館、2008年10月)。

- ⑤ きみつ少年少女合唱団、岡崎高等学校合唱コーラス部、岡崎混声合唱団の視察。
- (3) 21年度；自然で無理のない発声の体系的な指導内容の検討。21世紀の合唱や歌唱に適応した新しい指導法の検討。
- ① 米国インディアナ大学の音楽教育研究者、合唱指揮者インタビューと合唱授業視察を行った。
- ② 米国インディアナ大の児童合唱のための合唱指導法の教科書の検討、主に、声のウォーミングアップについて考察を行った。
- ③ 北海道教育大学、札幌市立美しが丘小学校、札幌市立幌西小学校、札幌市立真栄中学校、宮崎学園高等学校、名古屋少年少女合唱団の視察。
- ④ 合唱指揮者（日本合唱連盟顧問）へのインタビュー。
- ⑤ ソプラノリサイタルを開催し、研究成果を発表。言語の違いによるディクシオンの相違点と共通点を明確にすることで、日本語をいかに明瞭に、響かせて、美しい声で歌うかという日本語の発声の課題を追求した。米国、ハンガリー、フィンランド、イタリア、ドイツ、日本の6カ国語の曲目構成による。

#### 4. 研究成果

(1) 欧米と日本の発声の捉え方の相違を理解することの重要性と日本人の声や教育に相応しい柔軟なコダーイ・システムの活用の指摘。

米国、イタリア、ハンガリーでは、身構えて発声するのではなく、いわゆるいい声（豊かな声）ではなく、各自が持っている自然な声で合唱へのアプローチが行なわれていた。

特にハンガリーでは、コダーイ・システムに基づいてハーモニー感を育てる発声練習を発声のメインとしているため、合唱曲の練習では、日本の音取りに終始しがちな練習ではなく、ハーモニーをどうまとめていくかという方向で合唱練習が進行する。したがって、発声練習は、声のためだけではなく、和声感を養い、ピッチの正確さを高めていくための指導に重点が置かれていることがわかった。また、ハンガリーでは、幼少期から、民謡やわらべ歌を通して、自然で無理のない声から頭声発声を身につけると同時に、民謡を芸術的な作品として大切に扱い、教材のメインに位置づけていることがわかった。しかし、ここで熟慮しなければならないのは、言語の違いと発声上の違いの2点である。日本人の場合、母語である日本語で歌唱する場合、下顎に力が入りやすい、咽喉への負担が大きい、顔の筋肉をあまり使わない、言語に使われる周波数が低い等、発声上様々な問題がある。そのため、日本で行われている発声練習は、身体の使い方、支え、筋肉の使い方など、形から入る場合が多く、発声に対して身構える傾向がある。コダーイ・システムの一部を日本の音楽教育に活かし、児童・生徒の自然な声を引き出す合唱指導について以下の5点を提案する。

- ① 幼少時から母国語の民謡やわらべうた等に親しませ、歌や遊びの中で自然で無理のない発声を獲得させること。→声の育成の出発点
- ② 必要に応じて、ソルミゼーションによる移動ドの発声練習、ハンドサインを取り入れること。→正確な音程の育成
- ③ 和声的・非和声的な音感を養う発声練習を取り入れること。→ハーモニー感の育成
- ④ グローバルスタンダードな発声（頭声的発声）を獲得させること。→多様な曲種や発

声に対応できる柔軟な身体と心の育成→  
咽喉に負担のない自然な発声へ

(2) 21 世紀の多様な合唱に適応した合唱指導法の指摘。

児童生徒が合唱の能力を高めるためには、(1)で述べた 4 点に加えて、柔軟性のある声の育成のため、心身の開放を伴った呼吸法やリラクセス法を重視したウォーミングアップの検討が必要である。ハンガリーでは発声体操的なものは見られなかったが、米国の小学校では、生徒たちは授業の最初に呼吸法のトレーニングを実践していた。これによって、身体と精神面のリラクセスがなされ、合唱授業に自然に集中していく様子が伺えた。また、欧米や日本国内で行った 11 名の合唱指導者へのインタビューから、特に日本の合唱教育の特徴として、「心」や「皆で創り上げる」ことを大切にしたい、いわゆる「音楽で心をつなぐ」といった精神面での充実が、合唱教育の基盤にあることが確認された。よって、本研究で得た知見や実践方法を基盤として、心技体のバランスのとれた合唱指導法についての研究が日本の合唱教育には重要であるとの結論を得た。合唱や歌唱表現で自分の力を最大限に発揮するため 21 世紀の学校教育における日本の合唱教育のあり方や指導法を検討するに際して、新たにこれらの視点を導入した研究を試みたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計 5 件)

- ① 虫明眞砂子、黒井かおり、合唱の基礎能力を伸ばす指導法に関する研究 I、岡山大学教育学部研究集録、査読無、第 142 号、2010、pp.27-38.
- ② 虫明眞砂子、イタリアの合唱教育に関する一考察、岡山大学教育学部研究集録、査読無、第 142 号、2009、pp. 91-99.

③ 虫明眞砂子、学校教育における合唱教育の在り方と発声の捉え方、日本声楽発声学会誌、査読有、第 37 号、2009、pp.32-42.

④ 虫明眞砂子、児童・生徒の自然な声を引き出す合唱指導について、岡山大学教育学部研究集録、査読無、第 139 号、2008、pp. 91-99.

〔学会発表等〕 (計 9 件)

① 虫明眞砂子、ソプラノリサイタルでの演奏発表 (伊、米、ハンガリー、独、チェコ、日の 6ヶ国語による)、ルネスホール (おかやま旧日銀ホール)、中国二期会ルネスクラシック実行委員会主催、2010 年 3 月 13 日.

② 虫明眞砂子、創作オペラ「かぐや姫」(平井秀明作曲)の主演、主催：オペラ「かぐや姫」真庭公演実行委員会、久世エスパスホール、2009 年 3 月 29 日.

③ 虫明眞砂子、垣花洋子、林裕美子他 5 名、CD「日本歌曲第 3 集 中田喜直 (I) 小倉朗 別宮貞雄 磯辺淑」の演奏発表 (別宮貞雄作曲「淡彩抄」全曲の演奏)、CDFMC-5053~5054 ファウエムミュージックコーポレーション、2009 年 2 月発売.

④ 虫明眞砂子、欧米における合唱教育に関する考察、平成 20 年度日本声楽発声学会第 84 回例会、2008 年 5 月 25 日、東京藝術大学.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

虫明 眞砂子 (MUSHIAKI MASAKO)

岡山大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：90206847